

つからである。尤もこれには例外がある。たとへば卷五の松浦河に遊ぶ歌（八五三―八六〇）である。この歌の作者については諸説があるが、まづ大伴旅人説にしたがつてよいかと思ふ。その旅人が肥前松浦の玉島の潭に遊んだとき、魚を釣る女子等に遭つた。そこで彼女らとの間に歌を贈答したといふので、八首の歌が載せられてゐる。しかしこの女子といふのは實は仙女であつて實在の人間ではないとされてゐる。結局旅人が創作した架空の人物といふことになる。結局この八首は贈歌、答歌ともに旅人一人の作である。同じ作者の梧桐日本琴の歌（八一〇―八一―）もさうだし、卷十六の傳説歌にも同じやうな性質と考へられるものがある。要するに贈答歌にも一人で贈歌も答歌も作つた場合があるわけであるが、しかしこれらは特別である。贈答歌とはいふものの實は贈答歌を装つたものに過ぎず、偽の贈答歌である。しかもすくなくも外形的には贈る人と答へる人とが存在してゐる。いづれにせよ眞の意味の贈答歌を一人で作るといふことは常識的には考へられないことである。しからは問答歌においては如何。これはしかし、問答歌は、――問答歌たることの明示ある歌は、卷四の安倍蟲麻呂と大伴坂上郎女との間によみ交はしたもの（六六五―六六七）以外には作者を記したものがないから、果していかにやうにして作られたものであるかはつきりしない。ただすくなくも、二人でよみかはした

た場合があることは右の例で斷言できる。

次に卷七に次のやうな例がある。

佐保河に鳴くなる千鳥何しかも川原をしぬびいや河のぼる（一二五二）

人こそはおほにも言はめわがここだしぬぶ川原を標ゆふなゆめ（一二五二）

右二首詠鳥

これは千鳥とよみかはした問答歌である。しかし千鳥が歌を詠むことは現實にはあり得ないことである。おそらくこの一組は一人の作者が單獨に、あるひは二人（以上）の人が協同して、作つたと考へてよいだらう。この一組がさうだとすれば、次にある「詠白水郎」と左注のあるもの（一二五三―一二五四）も同じやうにしてできたものと推察してさし支へないであらう。かくして問答歌には（一）一人で、あるひは二人（もしくはそれ以上）で協同して、作つた場合のあることがいへる。（卷四の蟲麻呂、坂上郎女の場合もこの中に包含される。）

次に卷十、春相聞部にかういふ例がある。

(イ) 梓弓引津のべなるなのりその花咲くまでに逢はぬ君かも（一九三〇）

(ロ) 川上のいつ藻の花のいつもいつも來ませわがせこ時じけめやも（一九三二）

この二首のうち(ロ)は巻四に吹黄刀自の歌として載せるもの(四九一)と同じ歌である。又(イ)の歌は巻七、旋頭歌部にある。

(ハ) 梓弓引津のべなるなのりその花つむまでに逢はざらめやものりその花(一二七九)の類歌であり、おそらくその改作だと考へられる。(おそらくその逆ではない。)して見ると、古歌をそのまま借用し、あるひは改作して、これを組み合わせさせて問答歌を作った場合があつたことになる。もし又(イ)を以て(ハ)に據つたものでなく、全然の創作だとするならば、古歌を答歌とし、これに新たに問歌をよみ添へて問答歌を作つたことになる。(この際(イ)が贈答歌として佚名氏と吹黄刀自との間により交はされたものであり、巻四はその答歌のみを採つたのだとか、佚名二氏の間で作られた贈答歌の一方(ロ)が何かの事情で吹黄刀自に結びついて同人作として傳へられたものだとかいふ風にも考へられるが、おそらくさうではあるまい。)

これと同じやうな例は同じ巻の同じ部にある次の一組である。

- (イ) 春山のあしびの花のあしからぬ君にはしるやよそるともよし(一九二六)  
(ロ) 石上布留の神杉神びにし吾やさらさら戀にあひにける(一九二七)

右一首不<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>春歌、而猶<sub>以</sub>和載<sub>三</sub>於<sub>二</sub>茲次<sub>一</sub>。

この一組は兩首の關係があまり緊密でないやうであるが、左注の文により、原資料に問答歌として載つてゐたことが明らかである。しかして(ロ)は人麿歌集の歌、

- (ハ) 石上布留の神杉神さびて戀をも我はさらにするかも(巻十二ノ二四一七)

の類歌である。しかして(ロ)と(ハ)との關係につき考へられることは、(1) (ハ)が(ロ)に據つて作られたか、(2) (ロ)が(ハ)に據つて作られたか、(3) 別に本歌があつて(ロ) (ハ)がそれに據つて作られたか、この三つの場合である。(1)の場合だとするとこの際に立たないが、しかし兩歌をよみ比べてみると、(ハ)の方の調子は非常に自然であるのに對し、(ロ)の方は調子になにか不自然な、ひつかかるものがあつて、これはやはり(ハ)といふ原歌を改作して(イ)に組合せて問答歌としたと考へられるのである。(イ)の方も巻八の草香山歌(長歌、一四二八)の一節「……山も狹に咲けるあしびのあしからぬ君をいつしか……」の句と關係があり、この句を典據としてゐるやうな感じがする。)次に巻十一にかういふ例がある。

- (イ) 眉根搔き嚏ひ紐とけ待てりやもいつかも見むと戀ひ來し吾を(二八〇八)

右上看<sub>二</sub>柿本朝臣人麿之歌集中。但以<sub>二</sub>問答<sub>一</sub>故累載<sub>三</sub>於<sub>二</sub>茲次<sub>一</sub>也。

- (ロ) 今日なれば嚏ひ嚏ひし眉痒み思ひしことは君にしありけり(二八〇九)

## 右二首

左注によりこの一組が問答歌として何かの資料に出てゐて、それを卷十一編者がそのまま引載したるものなること明らかである。しかも(イ)は人麿歌集に出づる歌である。(卷十一、正述心緒部二四〇八、ただし第三句「待哉」とあり。)そこで次の二つの場合が考へられる。(1)はじめ問答歌(あるひは贈答歌)として何かの資料に出てゐたものを人麿歌集は問歌(イ)の方だけをとつて載せ、卷十一にはそのまま問答の體裁を崩さずに採録したのであるか、あるひは(2)人麿歌集に(イ)のみが出てゐて、それにあとから後人が(ロ)をよみ添へて問答歌の體裁にしたものであるか。もし後の場合の想像があたつてゐるならば、この一組は問歌を古歌からとり、これに答歌をあらたによみ添へて問答歌としたことになる。

このやうにしてなほ二三の類例をあげるならば、

- (イ) 赤駒の足搔速けば雲居にも隠り往かむぞ袖まけわぎも (卷十一ノ二五一〇)  
 (ロ) こもりくの豊泊瀬道は常滑のかしこき道ぞ戀ふらくはゆめ (同二五一一)  
 (ハ) うまざけの三諸の山に立つ月の見がほし君が馬の音ぞする (同二五一二)

## 右三首

この一組は人麿歌集に出づるものであるが、(イ)は卷二の「柿本朝臣人麿從三石見國別妻上來時歌」の中、

青駒の足搔を速み雲居にぞ妹があたりを過ぎて來にける (一云あたりは隠り來にける) (卷二ノ一三六)

の歌の改作たること歴然である。又

- (イ) 念ふ人來むと知りせばやへむぐらおほへる庭に珠しかましを (卷十一ノ二八二四)  
 (ロ) 玉しける家もなにせむやへむぐらおほへる小屋も妹と居りてば (卷十一ノ二八二五)

## 右二首

(イ)の歌は卷六の「九年(平天)丁丑春正月橘少卿并諸大夫等集三彈正尹門部王家宴歌二首」のうち(ハ) あらかじめ君來まさむと知らませば門に屋戸にも珠しかましを (一〇一三)

## 右一首主人門部王

を原歌とするもののやうに思はれる。

- (イ) わがせこが使を待つと笠も着す出でつつぞ見し雨のふらくに (卷十二ノ三二二一)  
 (ロ) 心なき雨にもあるか人目守りともしき妹に今日だに逢はむを (同三二二二)

右二首

この中(イ)は卷十一、寄物陳思部に重出する歌(二六八一)である。又

- (イ) うつせみの人目をしげみ逢はずして年の経ぬれば生けりともなし(卷十二ノ三二〇七)
- (ロ) うつせみの人目しげくばぬばたまの夜の夢にをつぎて見えこそ(同三二〇八)

右二首

(イ)の類歌に次の歌がある。

- (ハ) まそ鏡見あかぬ妹に逢はずして月の経ぬれば生けりともなし(卷十二ノ二九八〇)
- 又(ロ)の方は卷五に載せる大伴旅人の歌

(ニ) うつつにはあふよしもなしぬば玉のよるの夢にをつぎて見えこそ(八〇七)  
に據つたことまづ疑ひないと思ふ。次に

- (イ) ねもごろにおもふわざもを人言のしげきによりてよどむ頃かも(卷十二ノ三二〇九)
- (ロ) 人言のしげくしあらば君も吾も絶えむといひて逢ひしものかも(卷十二ノ三二一〇)

右二首

(イ)の類歌として卷四に佐伯宿禰赤麻呂の歌

(ハ) 初花の散るべきものを人ごとのしげきによりてよどむころかも(六三〇)  
がある。又

- (イ) 明日よりは戀ひつつあらむ今夕だにはやくよひより紐とけ我妹(卷十二ノ三二一九)
- (ロ) 今さらに寝めやわがせこあらた夜のひと夜もおちす夢に見えこそ(同三二二〇)

右二首

(ロ)の類歌として

(ハ) わが心とのぞみし念ふあらた夜の一夜もおちす夢に見えこそ(卷十二ノ二八四二)  
があり、人麿歌集出の歌である。

- (イ) ただひとり宿れど宿かねて白たへの袖を笠に著ぬれつつぞ來し(卷十二ノ三二二三)
- (ロ) 雨もふり夜もふけにけり今さらに君いなめやも紐ときまけな(同三二二四)

(イ)は卷九の碁師の歌

(ハ) 思ひつつ來れど來かねて水尾が崎眞長の浦を又かへりみつ(一七三三)  
と調子のあひ通するものがある。

又卷十三の三三〇五―三三〇八が人麿歌集の歌(三三〇九)に據つて作られたものなること

はすでに述べたところである。

以上の如くして問答歌には(二)古歌をそのままとり又は改作して問歌あるひは答歌とし、又はこれを組み合せて問答歌としたものと考へられる場合があるわけである。(尤も贈答歌の中にも大伴池主と家持との間にとり交はしたものの(卷十八ノ四〇七三―四〇七九)の如く、古歌をその一部に用ゐた例があるのであるが。)

次に又かういふ例がある。

卷十、春雑歌部、「詠鳥」の項の最後の二首、

- (イ) 山高み降り来る雪を梅の花散りかも來ると念ひつるかも(一云梅の花咲きかも散ると)  
(二八四一)

- (ロ) 雪をおきて梅をな戀ひそあしひきの山かたつきて家居せる君(一八四二)

右二首問答

卷十四、「防人歌」中

- (イ) 置きていかば妹はまがなし持ちて行く梓の弓の弓束にもがも(三五六七)  
(ロ) おくれるて戀ひばくるしも朝狩の君が弓にもならましものを(三五六八)

右二首問答

これらは事實上贈答歌と異るところなく、單に作者未詳だといふだけのちがひに過ぎない。卷十二の問答歌の中三二一一より三二二〇に至る五組十首(全部羈旅に關す)も同じ性質のものであらう。かくして(三)贈答の歌をそのまま持つて來て問答歌とした場合もあるわけである。

最後に卷十三の問答歌四組はこれ亦一種の贈答歌であるが、「隱口の泊瀬の國にさ結婚に吾が來れば……」(三三三二〇)の歌は古事記に出てる八千矛神と沼河比賣との唱和の歌に據つたもので、あるひはこの一組は歌舞劇における掛合ひの歌の歌詞として見るべきものではないかと思はれる。有名な「つぎねふ山城道を他夫の馬より行くに己夫し歩より行けば……」から「馬買へば妹歩行ならむ……」に至る一組(三三一四―三三一七)にもあひ似た性質が見られるし、「もの念はず道行きなむも……」以下の一組(三三〇五―三三〇八)も人歌麿集の歌を分割したものとはいへ、やはり同種のものとして見られさうである。してみると(四)歌舞劇中の唱和の部を獨立させて問答歌としたのではないかと考へられる場合もあるわけである。

以上述べたところを要約すれば、問答歌の成立には、

- (一) 一人で、あるひは二人(もしくはそれ以上)で協同して、創作したと考へられる場合

(二) 古歌をそのまま借用し又は改作して問歌あるひは答歌とし又はこれを組み合わせせて問答歌としたと考へられる場合

(三) 贈答の歌をそのまま持つて來て問答歌としたと考へられる場合

(四) 歌舞劇の唱和の部を獨立せしめて問答歌としたのではないかと考へられる場合

この四様の場合があるわけである。しかしこれらは贈答歌の要件(1)、贈答歌には二人(又は二組)の作者が存在しなければならぬ、の規定を乗り越えるものであつて、問答歌においては個々の歌の作者が誰であるかは問題にならず、それよりも問歌と答歌との組み合わせはそのものが重要性を持つてゐることを示すものである。

### 5 問答歌の目標——問答歌を贈答歌から區別するもの

贈答歌の要件(2)は、贈歌と答歌とはたがひに對應するものでなければならぬといふのである。これも亦わかりきつたことであつて、對應しなければ贈答歌にならないからである。しかしながら、ただそれだけではない。前項でも述べたごとく贈答歌は贈者と答者と二人の作者の存在を必要とする。贈者は答者を對象として贈歌を作り、これに對して答者が答歌を作つて應

答したときはじめて贈答歌が成立するのである。かくのごとくして贈歌と答歌はたがひに對應し、しかしその背後に贈者と答者との人格の對峙がある。贈者と答者とがそれぞれの位置を守り、その位置に立つて應酬交情するところに贈答歌の世界がつくられるのである。その世界は贈者と答者との人格の對峙を基調とする世界である。結果的に見てそれは贈歌と答歌とを結合した一つの綜合的世界であるとしても、二つの人格の對峙を基調としてゐる點においてそれはあくまで二元的世界である。しかしその贈者と答者とが對峙し、したがつて贈歌と答歌との關係が對立的であるといふ點において、かの歌會(たとへば卷五の梅花歌のごとき)における個々の歌の關係が竝立的であり、追和歌(たとへば卷二の有間皇子自傷の歌に對する長忌寸意吉麿、山上臣憶良の追和歌のごとき)の本歌に對する關係が追隨的であるのとのちがひがあるが、全體を綜合した世界が二元的もしくは多元的であつて一元的でないといふ點において共通した性質を持つてゐる。問答歌は如何。問答歌においても問歌と答歌との對立はある。しかしながらそこには作者と作者との對峙はない。作者が誰であるかは問題にならず、それよりも肝腎なことは問歌と答歌との對立——組み合わせせであり、その組み合わせによつて生まれるものである。贈答歌において結果としてあらはれるもの、それが問答歌の目標となるものであ

る。問答歌がかならずしも二人の作者の存在を必要とせず、又古歌を借用し又はこれを改作して材料とすることを許される理由がそこにある。問歌と答歌とを組み合わせ、兩者の對立を止揚して生ずる綜合的世界こそ問答歌の目ざす世界である。贈答歌の世界を二元的世界といふならば、問答歌の世界は一元的世界である。

かくして贈答歌の要件(2)、贈歌と答歌とはたがひに對應しなければならぬといふ規定は問答歌にもまた適用さるべきものであるが、その對應の意味に上述の如きちがひがあるのであつて、そこに問答歌を贈答歌から區別するもの——問答歌の特質を見出だすことができる。

もちろん贈答歌をそのままとつて問答歌としたと見られる例があり、むしろ多くの贈答歌はそのまま問答歌としてとり扱はれ得るものであり、反對に贈答歌の中にも問答歌的效果を意識して作られたものがあるであらう。見方によつて同じ歌が贈答歌ともなり得れば問答歌ともなり得るのであつて、兩者の間にはつきりした境界線を引くことは實際的には困難である。萬葉編者としてもさほど深く考へて兩者の別を立てたわけではなく、真相はもつとすつと外面的なところにあつたと見るべきであらう。問答歌たらんことを意識して作られた安倍蟲麻呂と坂上郎女との唱和の歌が作者の名を明らかにしてゐるがゆゑに問答部に入れられず、反對に羈旅悲別

の情をよみ交はした事實上の贈答歌が作者の名を明らかにせざるのゆゑを以て問答歌とされてゐる(卷十二、三二一一—三二二〇)ごとき、その證である。さらにその部立が作者不明の卷のみにかぎられて作者明らかな卷になきごとき、いよいよしかりである。しかしながら、贈答歌に比較的自然的發生的に成り出でたものが多いのに對して、問答歌に意識的、目的的に組み合はされたものが比較的に多いことは又否定しがたい事實であるし、又その事情の如何にかかはらず、問答の部を設け、又は問答歌たることを明示してゐること自體が、萬葉編者の關心が問答そのもの——とは、つまり問歌と答歌との對應そのもの、の上にあつたことを示すものであり、以上の點をもとにして問答歌の特質を規定して行けば、上述のごとき論が成り立ち得ると思ふ。

## 二 問答歌の編纂的位置

問答歌は本質上贈答歌と區別さるべき特質を持つてゐることは前述したごとくであるが、形式的には贈答歌と同様二人の間に唱和された形になつてをり、實際的にも贈答歌と區別するこ

とは困難である。したがつてそれは部立としては贈答歌と同じく相聞部に屬すべきものである。事實多くの問答歌は相聞部の一部門として、又はその別提的部門としてとり扱はれてゐる。(資料の項参照。)ただここに問題となるのは卷七及び卷十の一部で雑歌部に入つてゐるもののあることである。殊に卷十では雑歌部と相聞部と兩方に分屬してゐる。ある問答歌は雑歌として扱はれ、ある問答歌は相聞歌として扱はれてゐるのである。その差別の規準はどこにあつたか。今その兩部に屬する問答歌の内容を見ると、相聞部に入れるものは皆男女の間に唱和された形になつて居り、つまり戀愛歌の内容を持つてをり、雑歌部に入れるものはかかる内容を持つてゐない。

一體相聞歌が原義上戀愛歌と同義でないことは先哲も言へるところであり、又實際的にも相聞部の歌が全部戀愛歌でないことも證據立てられてゐる。それにもかかはらず問答歌が上述のごときとり扱ひを受けてゐる事實はどう解釋したらよいか。この兩卷の編者が問答歌を以てかならずしも自然發生的な贈答歌的なものばかりとせず、意識的目的的に組み合わせられたものもあることを自覺して、かかる種類のことを雑歌部に入れ、純粹贈答歌的なものを相聞部に入れたのであらうか。しかし事實はこのことを否定する。卷十の春相聞部に出づる十一首(一九二

六一―一九三六)のごときは意識的目的的に組み合わせられたものなること歴然たるにもかかはらず相聞部に入つてをり、反對に春雑歌部、夏雑歌部に入れるもの(一八四一―一八四二・一九七六―一九七七)はこれよりはるかに純粹贈答歌的な性質を持つてゐるにもかかはらず雑歌部に入つてゐるのである。しかしして前者は男女唱和の形になつて居り、後者はかかる戀愛歌の内容を持つてゐない。次に卷七、雑歌部の問答歌(一二五一一―一二五二・一二五三―一二五四)について言へば、――卷七雑歌部の後部四九首(一二四七―一二九五)は森本氏の説によれば若干首の例外をのぞいて相聞歌群の集合だといふ。(國語と國文學第四十號)しかしして前記の問答歌はその相聞歌群の一部に包含されてゐる。したがつて雑歌部に入つてはゐても實際は相聞歌としてとり扱はれたのだといふ解釋が成り立ち得るがごとくである。しかしじつは右の問答歌は「詠鳥」、「詠白水郎」なる左注を持つてゐる。つまり問答歌であつて同時に詠物歌なのである。しかしして詠物歌は卷七でも卷十でも雑歌としてとり扱はれてゐるのである。結局卷七の問答歌は、森本氏の説があるにもかかはらず、雑歌としてとり扱はれたと考へざるを得ない。しかししてこれまた戀愛歌の内容を持つてゐない。

以上の事實から歸納して來れば、すくなくも卷七、卷十の編者は、戀愛歌の内容を持つた問



答歌は相聞部に入れ、しからざるものは雑歌部に入れたのだと解せざるを得ない。

尤も卷七雑歌部は前述のごとき問題を持つた部であるから、あまり斷定的なことは言へないが、しかし相聞歌群に屬するといふ歌の部目を見ると、「臨時」といひ、「就所發思」といひ、「寄物發思」といひ、「行路」といひ、「旋頭歌」といひ、部内の歌の内容如何にかかはらず、その部目のみについて言へば（羈旅の部がさうであるごとくに）雑歌部に屬せしめてもさし支へないものであり、かつ又「就所發思」、「寄物發思」、「行路」の三部目の歌は内容から見ても雑歌部に入れても不都合ない歌である。結局卷七編者はこの卷の問答歌を戀愛歌の内容を持たざるが故に雑歌部に屬せしめたと考へることは不當でなと思ふ。次に卷十の編纂態度は他の卷と一寸變つたところがあつて、他の卷では相聞部に屬せしめられてゐる譬喻部をも雑歌部と相聞部に分屬せしめてゐるから、問答歌をも兩部に分屬せしめてゐるのもこの卷獨特の態度としてみとむべきかも知れない。が、いづれにしてもこの兩卷において、戀愛歌的内容を持つた問答歌を相聞部に、しからざるものを雑歌部に屬せしめてゐることは如何ともしがたい事實であり、（同じことは卷十における譬喻歌のとり扱ひ方についてもいへる。）このことは他の諸卷の相聞部に戀愛歌ならざる歌が入つてゐるごとく雑歌部に戀愛歌が、時には戀愛

歌的内容の贈答歌すら混入してゐるといふ逆の現象とともに、分類種目としての雑歌、相聞歌の意義、限界につき再吟味の必要あることを感ぜしめるのである。

あとがき

本書に収めた論稿はすべて過去に雑誌その他に発表したものであるが、この度全體にわたり相当手を加へたので、その事情につき簡単に説明を加へておきたい。

平安時代の歌學

昭和九年五月刊行の改造社「日本文學講座」第六卷「和歌文學篇上」に載せたものであるが、この度その一部を書き改め、序論の意味で卷頭に据ゑた。

古今序六義説について、その一解釋

昭和七年六月刊行された「佐佐木信綱博士  
還暦記念論文集」日本文學論纂に載せられたものであるが、この度と  
ろどころ手を入れた。

歌論として見たる勅撰集の序

「國文學  
解釋と鑑賞」の「中世歌論の研究」號(昭和十三年五月號)のために執筆したものである。  
前項の説に對して、いはば參考論文のやうな意味合ひも持つてゐる。

混本歌、歌體私考

「奈良文化」第二十二號(昭和七年四月刊)に載せたものに若干手を入れた。

歌經標式

「短歌講座」第十卷「特殊研究篇上」(昭和七年五月刊)のために執筆、その後同講座改訂版第一卷「歌史文獻篇」に轉載されたが、説明がやや簡に失したので、この度相當の手を入れて論の徹底を期した。

「歌枕」原義考證

「國文學誌」昭和六年九月號所載のものに、その後得た資料を加へ、全篇にわたつて相當の改訂増補をなした。

寄物陳思歌論

大學の卒業論文の一部を「寄物陳思歌の表現方法について」と題して「國語と國文學」昭和四年八月號に發表、その後これを壓縮したものを佐佐木信綱博士編の「萬葉學論纂」に收められたが、この度は「國語と國文學」に載せたものをもととしてこれに若干の手を入れ、追記二項を加へ、次の二篇と題名を統一するために標記のやうに改題した。

譬喩歌論

問答歌論

この二篇は「萬葉集講座」第六卷「編纂研究篇」(昭和八年七月刊)に「譬喩歌・問答歌論」として載せたものであるが、もともとこの題は編輯者から與へられたもので、その内容から見ても當然二つに分かるべき性質のものであるので、分割して收めたのである。

昭和二十年一月二十日印刷  
昭和二十年一月廿五日發行  
(三、〇〇〇部)

『上世歌學の研究』

定價 金 六 圓  
特別行爲社相賞 三十錢  
合計金 六圓三十錢

著者 中島 光房

發行者 古田 晁

印刷者 森島 金治郎

東京都墨田區區廳西六ノ四  
(東四四七)

東京都墨田區區廳西六ノ四

發行所 株式會社 筑摩書房

電話銀座(57)二〇五六番  
振替東京一六五七六八番  
會員番號 一一〇〇七八

總發元 日本出版配給統制株式會社  
東京都神田區淡路町二ノ九

出版會承認  
い450052



終

